

大学生は幽霊を信じないのか —科学的思考との関係性に着目して—

吉岡 一志
山口県立大学共通教育機構

Do University Students Deny the Existence of Ghosts? : A Focus on the Relevance of Scientific Thinking

Yoshioka Kazushi

The General Education Division, Yamaguchi Prefectural University

Summary

The purpose of this paper is to examine the possibility of denying the existence of ghosts through scientific thinking. In the past there has been a tendency to think that immature children mistakenly believe in “paranormal phenomena” and it is not fully understood how rational adults are able to believe in them. This study examines the relationship between belief in “paranormal phenomena” and scientific thinking. The results of this study show that the acquisition of scientific thinking has no effect on the denial of the existence of “paranormal phenomena”. It is suggested that the premise of immature children believing in “paranormal phenomena” should be revised.

キーワード：大学生、宗教と科学、幽霊、不思議現象

Key word : university students, science and religion, ghost, paranormal phenomena

I. 問題の所在

1990年代前後から「学校の怪談」がブームとなり、児童文学やアニメ、映画などのメディアの世界だけでなく、一部の研究者の間でも注目されることになった。このブームの火付け役とも言える常光（1993）は「学校の怪談」に子ども独自の世界があることを見出し、子どもたちが「学校の怪談」を通して学校教育に抵抗する姿を描きだそうとした。こうした立場は近藤（1997）や一柳（2005）など常光に後続する研究者にも引き継がれ、近代教育の抑圧に対する子どもたちの抵抗という図式で「学校の怪談」が捉えられるようになった。

しかしながら、「学校の怪談」を理解するこの図式は、教師などの大人が関与しない子どもだけの独立した世界を前提にしている（吉岡 2015、2016）。吉岡（2016）によれば、「学校の怪談」には一定数の教師が関与しており、教師もまたリアリティをもって「学校の怪談」を語っているという。だとすれば、「学校の怪談」は大人が関与しない子どもの

文化であるとすることはできないだろう。このことは「現実と虚構の区別が曖昧な子ども」が「学校の怪談」のような「不思議現象」を信じてしまうとする一般的な見方と矛盾する⁽¹⁾。このように、これまで「学校の怪談」など「不思議現象」は子どもの領域にあるものとされ、「不思議現象」に対する大人の関与はあまり注目されてこなかった。

もちろん「不思議現象」に関する大人の関与が、これまでまったく無視されてきたわけではない。心理学においては、錯覚などの用語で、人間の知覚の不完全さのメカニズムを明らかにしようとしてきた（チャプリズ・シモンズ 2014、ワイズマン 2012）。また、「破壊的カルト」を念頭に置きながら、人々が宗教にのめり込んでいくプロセスを解明しようとする入信の心理学も多くの研究成果を上げてきた（西田 1998）。ただし、こうした心理学の研究では、「不思議現象」を信じることや、特定の宗教に入信していくことを病理、あるいは逸脱と捉える傾向が強く、それらのことが意味することは十分に議

論されていない。

「不思議現象」への傾倒や信仰の社会的な意味については、宗教を中心に社会学が取り扱ってきた。島藺（2000）によれば、戦後の宗教社会学の最大のトピックは世俗化論であるという。近代化の進展に伴い宗教の社会的影響力が衰退していくとするのが世俗化論である。しかしながら、近代化が一様に宗教の世俗化をもたらすわけではないことは、日本の新興宗教の発展からも明らかである（島藺 2000）。海外の宗教社会学の成果を整理した伊藤（2003）は、制度宗教の衰退という点では世俗化の傾向はあるが、個人的な信仰心は若干の低下に留まるとともに、非制度宗教的で個人的な体験に基づくスピリチュアリティへの関心はむしろ高まっていることを指摘している。日本においても1980年代以降「精神世界」が注目されるようになってきている（島藺 2000）。

これらのことから、現代において「不思議現象」は子どものものであるとは言えないことは明らかである。しかしながら、宗教社会学において島藺（2000）や伊藤（2003）などが扱ってきたものは、制度宗教ではないにしても自らの変革をもたらそうとするある種の「運動」であった。一方で、「学校の怪談」は必ずしも自己の変革をもたらすような思想体系を持つわけではない。どちらかと言えば、木下（1994）が言うような「消費的コミュニケーション」に位置づけられる一過性のうわさや都市伝説と呼ばれるようなものである。木下（1994）が「消費的コミュニケーション」と呼ぶ限りにおいて、「学校の怪談」は虚構であり、人々は疑似的な恐怖を楽しんでいるに過ぎないように見える。

では、運動を伴わないような「学校の怪談」は、人々に虚構として認識されているのだろうか。こうした疑問に答える研究は実のところ多くはない。どれほどの人々が「学校の怪談」を現実の問題として見なしているのか明らかにする必要があるだろう。ただし、吉岡（2016）が指摘したように、研究者やメディアによって「学校の怪談」が「発見」され、児童文学に取込まれたことで、多くの人々は「学校の怪談」を子どものものであると自明視するようになると考えられる。そのため、「学校の怪談」という言葉そのものに、すでに虚構、あるいは子どものものというイメージがつきまとうだろう。そこで本調査では「怪談」の題材として古くから語られる幽霊に対する人々の態度を取り上げる。

諏訪（2010）によれば、幽霊という語彙自体は平安時代末に初めて登場するのだという。その後近世に講談師などの文芸の専門家によって人々の幽霊のイメージは構成されていく（諏訪 1988）。そして、香川（2005）が指摘するように、明治期に入ると幽霊の存在は「神経」などの科学的な言葉で否定され

てきた²⁾。つまり、宗教と同様に、幽霊も近代化の過程で「世俗化」していくのである。しかしながら、現在もメディアの中で幽霊を扱われることは少なくないし、また、先述の通り、心理学などでは幽霊の存在はいまだに否定され続けている。このことから、現代においても、幽霊は人々が信じているのか否かにかかわらず、科学によって否定し続けなければならないほど、一般の人々の間に語り継がれていることが予想されよう。

以上のことから、本調査では、第一に、大学生を対象にして、どれほどの人々が幽霊の存在を信じているかを明らかにする。第二に、近代化のプロセスと不可分な関係にある科学に対する態度が幽霊信仰にいかなるインパクトを与えるのかを検証する。最後にこれらの結果をもとに「学校の怪談」をめぐる大人と子どもとの間の権力関係について考察する。

II. 調査の概要

本調査は、山口県立大学において、筆者が担当する講義（2科目）の履修者を対象とし、2015年7月にweb上で回答を求めたものである。履修登録者数は計400名であり、その内回答が得られたのは272名（68%）であった。サンプルの属性は表1の通りである。

本調査は、山口県立大学でのみ行われたものである上、表1からわかるようにサンプルの属性にも大きな偏りがある。性別では女性が87.4%となっており、また学年では1年生（43.3%）、2年生（32.8%）だけで75%を超える。学科については社会福祉学部が49.1%と他学科と大きな開きがある。したがって、本調査から得られた結果は安易に一般化できるものではない。しかしながら、同様の調査は多くないが、一部の先行研究の調査と比較しながら分析することで、ある程度の知見は得ることができよう。

表1 サンプルの属性

性別	女性	男性	合計			
	87.4	12.6	100.0 (270)			
学年	1年生	2年生	3年生	4年生以上	その他	合計
	43.3	32.8	16.8	7.1	0.0	100.0 (268)
	社会福祉	国際文化	文化創造	看護	栄養	合計
学科	49.1	12.4	15.4	17.2	6.0	100.0 (267)

表中の数字は%、括弧内は実数（以下同様）

III. 分析

1. 幽霊の体験の状況

はじめに、大学生が幽霊とどの程度出会っているか見ていく。松田（1998）によれば、うわさの特徴の一つに「身近だとは感じられるけれど、決して会うことのない人」（p.32）を情報源とすることでリアリティが担保されるという。つまり、うわさは情報源が完全に不明ではなく、「友だちの友だち」と

いう身近な人々から伝えられることで、実際にあったことのように思える。それでいて、確認するのが難しいという状況が、うわさの特徴であろう。だとすれば、「幽霊を見た」という経験談は、経験した本人ではなく、間接的に聞き及んだ語りとなるだろう。

表2は幽霊に直接遭遇した人、また直接経験者に出会った人々の割合を示したものである。表を見ると、幽霊に直接的に遭遇した学生は17.6%となっている。約2割もの学生が幽霊に直接遭遇したという結果は多いと見るべきだろう。現代社会では幽霊が存在する現実に沿って各種制度が成立しているわけではない。例えば医学の世界で「幽霊が見える」という症状と、その診断に基づいた治療が行われることはないだろう。つまりはフォーマルには幽霊は否定されている中で、うわさ話やフィクションではなく、自身の体験として幽霊との出会いを経験しているのである。

こうした直接経験したとする人々が、その経験を他の人々に伝達するのであろう。表2が示す様に、直接経験者に出会ったことの有無を尋ねた質問では、66.5%が「ある」と回答している。このことは幽霊に遭遇したという語りの発信源が特定されていることを意味している。直接経験者に出会うことがなければ、出所の不確かなうわさ話として切り捨てることは可能なかもしれない。しかし、半数以上の人々が直接経験者に遭遇しているとなると、単なるうわさとして処理しがたい問題となってしまうのではないだろうか。さらに表は示していないが、25.6%の学生が「家族や親族」に体験者がいると回答している。幽霊についての語りは人々にとって、フィクションとして消費していると言うよりも、自然なこと、起こりうることとして流通しているようにも見える。この点で、幽霊譚はうわさ一般とは様相を異にする。

表2 心霊現象との体験状況

	ある	ない	合計
これまで幽霊を見たり、声を聞くなどの現象を直接経験したことがありますか	17.6	82.4	100.0 (272)
あなたは幽霊を見た、声を聞いたなどという人に出会ったことがありますか	66.5	33.5	100.0 (272)

2. 大学生は幽霊を信じているのか？

前項では、幽霊との遭遇体験の状況を確認し、大学生の周りに体験者が一定数おり、それだけ幽霊が身近なものになっていることを見てきた。では、実際に大学生は幽霊の存在を信じているのか見てみよう。

表3には幽霊を信じている学生の割合を示している。「一般に語られる幽霊などの体験談をどの程度信じていますか

度信じていますか」という問いに対し、「強く信じている」には11.4%、「少し信じている」には55.5%の回答が得られたことが表からわかる。両方を足し合わせると66.9%にも上る。川上他(2010)も本調査同様、女性が78%と偏りがあるが、「霊」を信じると回答したのは67%であるという。また、吉岡(2006)が507名の大学生に行った調査³⁾では、「お化けや妖怪、幽霊」をどの程度信じるかという問いに対し、「絶対にいる」「ひょっとしたらいるかもしれない」の値はそれぞれ16.3%、54.3%となっており、合計70.6%であった。本調査で得られた値は、サンプルに大きな偏りはあるものの、ある程度現代の大学生一般の回答に近い値を示しているのではないだろうか。

NHK放送文化研究所(2010)の調査結果を見てみると、神仏を信じる20歳代の割合は、20%を前後している。その他若年層(16-29歳)の「祈願」は29%、「おみくじ・占い」は47%などの値がみられる。もちろん、この値は男女比など本調査のサンプルの属性と異なるため単純に比較はできない。しかしながら神仏、占いなど、それぞれの項目についての信仰の程度は大きく異なり、また幽霊を信じることに比べても値は低いものばかりである。いずれにしても、非科学的なもの、宗教的なものとして一括りにしがたいことは確認できる。

また、一方で、深谷他(1994)では「不思議なこと」が本当にあるかという質問を小学4~6年生の男女、1598名にアンケート調査を行っている。「絶対にある」と「あるかもしれない」を合わせた値を示すと、「心霊写真」は69.8%、「たたり」は56.1%、「生まれ変わり」は49.0%、「神かくし」は37.2%、「テレパシー」は42.1%であった。これも調査年代との違いなどから単純な比較ができるものではないが、「心霊写真」に示された値は、本調査の幽霊に対する大学生の態度と似ている。このことからすれば、幽霊を信じる子どもと幽霊を信じない大人という対立構図は適切ではないだろう。

表3 幽霊を信じている学生

	強く信じている	少し信じている	あまり信じていない	まったく信じていない	どちらとも言えない	合計
一般に語られる幽霊などの体験談をどの程度信じていますか	11.4	55.5	20.6	7.7	4.8	100.0 (272)

以上の調査結果だけを見ると、学生たちは人々の語りやメディアとの接触を通して日常的に幽霊に翻弄されているように見えてしまうだろう。しかしながら、必ずしも幽霊についてのすべての語りを鵜呑みにしているわけではない。表4は、流通している幽霊譚の中で事実がどの程度含まれると考えるか尋ねたものである。表を見ると「一部には実話もある」への回答者数は、圧倒的多数の69.1%である。

このことから、学生たちは、すべての幽霊譚を無批判に信仰しているというよりは、ある程度語りを選別しながら、何らかの基準で虚実の線引きを行い、その上で、「実話」があると想定していることがわかる。

表4 幽霊譚に含まれる実話

	ほとんどが実話	一部には実話もある	ほとんどが実話ではない	わからない	合計
一般に語られる幽霊などの体験談にはどの程度実話が含まれていると思いますか	7.4	69.1	17.3	6.3	100.0 (272)

では、学生たちはどのような視点で、虚実を判断しているのだろうか。幽霊が見える原因を質問した結果を示したものが表5である。「靈感などの特殊能力」は68.8%と最も多く、次いで「視覚・聴覚など錯覚と呼ばれる心理現象」が44.5%、「解明されていない自然現象」が41.5%と続く。表3の結果と合わせてみると、幽霊を信じているとした回答者が「灵感」を支持していると考えられる。また、表4では「一部には実話もある」との回答が多くなっていることから見れば、一般に語られる幽霊譚には、自然現象や心理現象として理解すべきものが一定数含まれていると考えているのだろう。

その一方で、「ウソをついている」への回答は19.5%とそれほど多くない。故意に虚偽を語り他者を驚かせようとするような人々の存在はあまり意識されていないことがわかる。むしろ、何らかの原因により、幽霊のようなものが見えたり、声が聞こえたりするなど、実際に体験している人々が存在するという姿勢は貫かれている。この体験したものが、自然科学によって説明可能な場合もあれば、特殊な能力によって一部の人にだけ許された経験として位置づけられるのである。ただし、「灵感」を原因とする回答が7割弱と他の原因に比べ圧倒的に多くなっていることは注目すべきだろう。全体として見れば、灵感による説明が支配的になっているということである。

表5 幽霊が見える原因

	該当	非該当	合計
灵感などの特殊能力	68.8	31.3	100.0 (272)
精神病などの病	15.4	84.6	100.0 (273)
ウソをついている	19.5	80.5	100.0 (274)
解明されていない自然現象	41.5	58.5	100.0 (275)
視聴覚器官や脳などの身体的な異常	21.3	78.7	100.0 (276)
単なる思い違い	27.6	72.4	100.0 (277)
視覚・聴覚など錯覚と呼ばれる心理現象	44.5	55.5	100.0 (278)
その他	7.7	92.3	100.0 (279)
わからない	8.1	91.9	100.0 (280)

3. 幽霊は科学的言説によって抑制されるか

では、幽霊を信じるのが、科学的言説とどのような関係にあるか見ていこう。先に表5に示した「幽霊が見える原因」は、ある出来事をどの言説に

よって説明しようとするかを示すものである。つまり、幽霊を見たとする語りに対して、スピリチュアルな説明か科学的な説明かのいずれを選択するのかを表したものであると言える。

そこで、表3の幽霊を信じるとの回答と、表5の「幽霊が見える原因」のクロス集計の結果を表6に示した。なお、分析にあたっては、表3で示した回答から「どちらとも言えない」を除去し、さらに「強く信じている」「少し信じている」を「信じる」、「あまり信じていない」「まったく信じていない」を「信じない」に統合した。

表を見ると有意な差が確認できる項目は、「灵感」、「ウソ」、「身体的な異常」、「思い違い」「心理現象」の5つである。ここから言えることは「幽霊が見える原因」を「灵感」に求める人々は、幽霊を信じる傾向が強いことである。反対に、「灵感」以外の4つの項目では、いずれも幽霊への信仰に対し抑制的に働いていることがわかる。すなわち、「幽霊が見える原因」を、身体的な異常や、人間の知覚能力の限界性など、医学や心理学など科学的に説明できる現象と考えている人々は、幽霊を信じない傾向にあると言えるだろう。

表6 幽霊を信じる×原因のクロス集計

	信じる		
	非該当	該当	
灵感などの特殊能力	48.1	80.3	***
精神病などの病	72.3	59.0	
ウソをついている	74.2	54.0	**
解明されていない自然現象	68.9	72.2	
視聴覚器官や脳などの身体的な異常	75.0	52.7	**
単なる思い違い	77.8	50.0	***
錯覚と呼ばれる心理現象	82.9	54.0	***
その他	70.4	68.4	
わからない	68.9	85.7	

***は0.1%、**は1%水準で有意であることを示す

しかし、ディクソン (2013) は、近代化のプロセスにおける自然科学の発展は、必ずしも宗教と対立関係にはなかったことを論じている。ディクソン (2013) に従うならば、本調査で言う「不思議現象」は科学的な説明により淘汰されるわけではないとも考えられる。ところが、以上の結果からは、自然科学と「不思議現象」の対立関係を確認することができる。このことは何を意味するのであろうか。そこで、以上のような科学的言説を採用するか否かという視点ではなく、科学的思考の獲得状況との関係性を見てみよう。

近年の大学生が直面するリスクの一つとして、「破壊的カルト」(西田 1998) が注目されており、こうした問題への対応として、批判的に物事を捉える思考法を身につけることが称揚される(吉川他 2013、菊池他 1997など)。となれば、幽霊の存在は科学的態度の一つである論理的思考を身につけることで否定することも可能となるだろう。また、論

理的な思考は、自らの主張を相手に伝えたり、相手の矛盾を指摘したりして、異なる意見を調整する能力も同時に求められる。現在大学生が求められるこうした能力は、「不思議現象」を批判的に捉える素地ともなるはずであろう。反対に自らのこうした能力を低く見積もってれば、学生自身がリスクを引き受ける可能性を強く意識せざるを得ないと考えられる。以上のことから、表7には大学生が求められる科学的態度の獲得状況を示した。

表7 科学的態度の獲得状況

	とても そう 思う	少し そう 思う	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない	計
物事を論理的に考えることがどの程度身についていると思いますか	6.3	56.3	35.7	1.8	100(272)
自分の意見を他者に主張できる力があると思いますか	12.9	45.6	35.7	5.9	100(272)
他者の意見の問題点や間違いに気づいた時に指摘できると思いますか	13.2	47.1	36.8	2.9	100(272)

表7で得られた回答は「とてもそう思う」「少しそう思う」を「そう思う」、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」を「そう思わない」に統合し、表6の幽霊を信じるか否かの値とクロス集計を行った結果を示したものが表8である。

表を見てわかる通り、いずれの要因も統計的に有意な差が確認できなかった。すなわち、論理的思考の素養を持っていることが、幽霊への信仰を抑制しないということである⁽⁴⁾。幽霊の存在については、客観性、論理性、反証可能性などの要件から考えれば、科学に馴染みにくい側面があることは確かであろう。しかし、だからと言って、論理的な思考が必ずしも幽霊を虚構として位置づけることは困難なことなのかもしれない。以上のことから、論理的に考えれば幽霊を否定できる、論理的でない人々が幽霊を信仰してしまうという単純な図式は成立しないと見える。

表8 幽霊を信じる×科学的態度のクロス集計

	信じる	
	そう 思う	そう 思わない
物事を論理的に考えること	70.4	70.1
自分の意見を他者に主張できる力	71.6	68.3
他者の意見の問題点や間違いに気づいた時に指摘できる	72.3	67.0

4. 結果と考察

本調査で得られた結果をまとめると次のようになる。第一に、大学生たちは、実際に幽霊に出会ったとする人々にある程度の接触を持ち、幽霊譚が比較的身近に存在していること。第二に、幽霊に関する語りがある程度の真偽を選別しつつも、一部には真実があるものとして過半数が幽霊を信じていること。第三に、幽霊への信仰は科学的な説明によって抑制される反面、科学的な思考様式を獲得していることは幽霊譚を否定することにはつながらないこと

点である。

以上の結果から、「学校の怪談」をめぐる子どもと大人の権力関係について得られる示唆について考察してみよう。すでに指摘したように、これまで「学校の怪談」に関する先行研究では「学校の怪談」は大人が関与しない子ども独自の文化として理解される傾向にあった。もちろん、学校にいるほとんどは子どもであることから見れば、「学校の怪談」と子どもは結びつきやすい。しかし、吉岡(2016)が指摘するように、教師も一定のリアリティをもって「学校の怪談」を語っている。さらには本調査の結果を見れば、大学生の大部分が幽霊の存在を信じていると言えるだろう。このことから虚構性を理由に「学校の怪談」を子どものものとするわけにはいかないし、また虚構を語る子どもを見て、そこに子ども独自の心性を見出すわけにもいかないだろう。問われるべきは、なぜ虚構の物語を大人も子ども語る状況で、子どもだけがその所有者としてみなされてしまうかである。

しかし一方で、成長につれてサンタクロースを信じなくなるという研究成果も見られる(富田 2009, 2014)。富田(2014)もまた論理的思考を獲得していく過程でサンタクロースを信じなくなると指摘するが、同時に、論理的思考では捉えきれない側面があることも示唆する。すなわち、親やきょうだい、友人などからその存在を否定する証言を聞き及ぶような事態である。すなわち、信頼できる他者からサンタクロースは存在しないと聞いた証言を聞き、それを信用するのである。これは論理的思考によって一つひとつの疑問を検証していくというものではない。サンタクロースは存在しないという言説が既にあり、年齢を重ねるにつれ、そうした言説に徐々に取込まれていくという見方が可能だろう。

本調査では、幽霊を科学的言説で説明しようとする人々は幽霊の存在を信じない傾向があったにもかかわらず、論理的思考の習得の程度は幽霊を信じることと有意な関連がみられなかった。このことは富田(2014)の研究とも矛盾するものではない。大人になる、つまり教育される年数が増え、論理的思考を獲得するにしたがって、サンタクロースを信じなくなるように見えることは、疑似相関と考えられよう。我々は大人になるにつれて論理的思考を身につけていき、幽霊やサンタクロースを信じなくなるのではなく、その時々支配的な言説を選択するようになっていくと考えられる。だとすれば、「破壊的カルト」への対策として論理的思考を育成しようとする試みの効果は、再考されなければならない。

以上の議論から、未熟な子どもは論理的な思考が十分に身につけておらず「不思議現象」を信じてしまい、高度な教育を受けるにつれて「不思議現象」

を批判的に捉えることができる一人前の大人になるという図式は見直されなければならない。幽霊が見える原因として、科学的な言説を選択するのか、「靈感」という言説を選択するのかは、ディクソン(2013)の言葉を借りれば「さまざまな知識の源泉の相対的権威をめぐる見解の相違」(p.33)と考えることができよう。山之内(2003)が、ウェーバーの言う「脱魔術化」は、「迷信」を切り捨て、「科学」という魔術を信ずる「再魔術化」であったと指摘するように、どの知識が主導権を握るかの問題である。このことから「科学」の学習を完成していない子どもは、「脱魔術化」していないように見え、「科学」を身につけているはずの大人は「再魔術化」の状態におり論理的な思考で幽霊を批判できないでいると言えるのではないだろうか。

本調査からは、科学と幽霊の知識は、幽霊にその主導権があるように見える。幽霊が「脱魔術化」されずに生き延びているのか、あるいは、心靈学(一柳 1994)というベクトルで「再魔術化」されているのかは、本調査からは確証を得ることはできない。こうした知識の源泉がどこにあるのか、またそれはどのようにして権威を持つにいたったか、誰がこれらの権威を選択するのか、そのプロセスは明らかされる必要があるだろう。ここには、科学と「不思議現象」の主導権争いだけでなく、大人(成熟)と子ども(未熟)という対立軸が交錯していることを見落としてはならない。

引用・参考文献

- チャプリス・C, シモンズ・D, 2014『錯覚の科学』文藝春秋。
- ディクソン・T, 2013『科学と宗教』丸善出版。
- 深谷和子, 石井洋子, 山根はるみ, 1994「おぼけとジンクス」『モノグラフ・小学生ナウ』VOL.14-5, ベネッセコーポレーション。
- 廣田龍平, 2014「妖怪の、一つではない複数の存在論—妖怪研究における存在論的前提についての批判的検討」『現代民俗学研究』(6), 現代民俗学会, pp.113-128。
- 一柳廣孝, 1994『〈こっくりさん〉と〈千里眼〉』講談社。
- 一柳廣孝, 2005『「学校の怪談」はささやく』青弓社。
- 伊藤雅之, 2003『現代社会とスピリチュアリティ—現代人の宗教意識の社会学的探求』溪水社。
- 香川雅信, 2005『江戸の妖怪革命』河出書房。
- 川上正浩・小城英子・坂田浩之, 2010「不思議現象を信じる理由(1)」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』9, 大阪樟蔭女子大学, pp.15-25。
- 木場貴俊, 2006「近世の怪異と知識人—近世前期の

- 儒者を中心にして」一柳廣孝・吉田司雄編著『妖怪は繁殖する』青弓社, pp.144-157。
- 菊池聡・木下孝司, 1997『不思議現象—子どもの心と教育』北大路書房。
- 木下富雄, 1994「現代の噂から口頭伝承の発生メカニズムを探る—「マクドナルド・ハンバーガー」と「口裂け女」の噂」木下富雄他編『記号と情報の行動科学』福村出版, pp.45-97。
- 近藤雅樹, 1997『靈感少女論』河出書房新社。
- 近藤瑞木, 2006「儒者の妖怪退治—近世妖怪譚と儒家思想」『日本文学』55(4), 日本文学協会, pp.19-28。
- 松田美佐, 1998『うわさの科学』河出書房。
- NHK放送文化研究所, 2010『現代日本人の意識構造(第七版)』日本放送出版協会。
- 西田公昭, 1998『「信じるころ」の科学—マインド・コントロールとビリーフ・システムの社会心理学』サイエンス社。
- 島藺進, 2000「現代宗教と公共空間—日本の状況を中心に」『社会学評論』50(4), 日本社会学会, pp.541-555。
- 諏訪春雄, 1988『日本の幽霊』岩波書店。
- 諏訪春雄, 2010「日本幽霊学事始」『幽霊学入門』新書館, pp.124-136。
- 富田昌平, 2009「幼児におけるサンタクロースのリアリティに対する認識」『発達心理学研究』20(2), 一般社団法人日本発達心理学, pp.177-188。
- 富田昌平, 2014, 「子どもはなぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのか?—大学生による回想報告をもとに」『三重大学教育学部研究紀要』65, 三重大学教育学部, pp.149-158。
- 常光徹, 1993『学校の怪談—口承文芸の展開と諸相—』ミネルヴァ書房。
- ワイズマン・R, 2012『超常現象の科学—なぜ人は幽霊が見えるのか』文藝春秋。
- 吉川肇子・杉浦敦吉・西田公昭, 2013『大学生のリスク・マネジメント』ナカニシヤ出版。
- 吉岡一志, 2006『再生産される現代のフォークロア—『学校の怪談』を中心に』(修士論文)。
- 吉岡一志, 2015「『学校の怪談』と子ども文化」南本長穂・山田浩之『入門・子ども社会学』ミネルヴァ書房, pp.175-187。
- 吉岡一志, 2016「大人のまなざしが生み出す子ども文化—教師は『学校の怪談』をいかに語るのか」『児童文学研究』(48), 日本児童文学学会, pp.53-67。
- 山之内靖, 2003「『脱魔術化』した世界の『再魔術化』とどう向き合うか—グローバル化時代の『心のケア』を考える」井上芳保編著『「心

のケア」を再考する』現代書館, pp.216-244。

<註>

- (1) 菊池他 (1997) は「超能力、UFO、心霊などの超常現象や占星術・血液型性格判断などの占いと
いった・・・現在の科学的知識や常識では認められていない現象」(p.2)の総称として「不思議現象」を使用しており、本稿もこれにならう。ただし、廣田 (2014) も指摘するように、「非科学的なもの」は必ずしも自明ではない。占いは「非科学的」だがUFOは「科学的」だとすることも起こりうるため、「不思議現象」として一括りにすることで、個別の対象の歴史性、社会的側面を見落としてしまう危険性があることには十分注意が必要である。
- (2) ただし、前近代において幽霊の存在が否定されなかったわけではない。儒学者によって否定されている(近藤 2006、木場 2006など)が、これらは近代科学の枠組みによって否定されているわけではない。
- (3) 調査は2005年9月から10月にかけて、5つの国公私立の4年生大学で行われたものである。サンプルを構成する男女比は、男性43.9%、女性56.1%であり、学年は1年生53.5%、2年生16.8%、3年生23.0%、4年生6.7%である。
- (4) ここでの科学的態度の獲得状況は、あくまでも自己認識のレベルであり、実質的な能力を示す値ではない。学術的な訓練を受けた期間の長さによって科学的態度の獲得の程度が高まると考えた場合、上級学年と下級学年とで差が生じる可能性もある。そこで4学年を上級、下級の二値に統合し、信仰の程度とクロス集計を行ったが、有意な差は確認できなかった。